

筒御器鈔の法門

附、謀叛者二十六人に就て

鹽田義遜

一、器の四失

筒御器鈔の法門は秋元殿への法門であるが、就中、器の四失と信心。日本國謀叛の二十六人。諸宗の批判（四個格言の具文一九三二）。承久の亂の批判等實に廣汎に亘つて居る。今其中『器の四失』に寄せられた、法華經の信心入り難き所以を拜するに

御器と申すは『うつはもの』と讀み候……………器は我等が身心を表す。

とある如く、我等の身心はこれ法の器である。然るに濁水が月を浮べて澄むことは、甚だ稀である様に、法華經の信心は我等の身心に入り難いのは、器に完器がないと同じである。

即ち器に四の失あり。

一には「覆」と申して、「うつむける」なり。又は「くつがへす」。又は「蓋をおほふ」なり。
 二には「漏」と申して「水もる」なり。

三には「汗」と申して「けかれたる」なり。水淨けれども糞の入りたる水は用ゆる事なし。
 四には「糲」なり。飯に或は糞、或は石、或は土などを糲へぬれば人食ふ事なし。

といふ所謂「覆」「漏」「汗」「糲」の四失であるが、これは天台大師が、法華經の序品の四衆即ち、發起（説法の發起人）、影響（佛陀の隨侍の菩薩）、當機（當面の聽衆）、結縁（未來得脱の縁を結ぶ大衆）の四衆の中、最後の結縁衆を釋して、

結縁とは、過去の根淺く、覆漏汗糲し、三慧を生ぜず。但だ未來得度の因縁を作す、（文句五、三九取意）

の文に依て、結縁の意を信心の意に隨義轉用して法華の信心を釋されたのである。大師の意に依れば、「覆漏汗糲し三慧を生ぜず」とある故に、妙樂大師は右の文を釋して

聞慧無きが故に、器の現の覆るが如く。思慧を闕くが故に、器の已に漏るか如く。修慧無きが故に、器の汗糲せるが如し。器仰て全しと雖、汗糲を以ての故に、用ゐる者の爲めに棄てらるが如し。故に總結して三慧を生ぜすと云ふ。（記五、四〇）

といへる如く、覆漏汙雜の四失は聞、思、修の三慧に對すれば、覆を聞慧即ち聞法に依て生ずる智慧に配し。漏を思慧即ち法の中に含まれた理を思索して生ずる智慧に配し。汙雜の二を合して修慧、即ち觀念修行に依て生ずる智慧に配して居る。要するに煩惱の覆、業の漏、苦の汙雜の三道に依て支へらるゝに依て、三慧を生ずることが出來ず、隨つて三德秘密藏の涅槃に住することが出來ぬといふのである。即ち結縁の衆は過去の善根淺い故に、三道の障礙あつて、現座に益を得ず、未來得脫の因縁を結ぶに當るといふのである。

二、四失と三失

大聖人は右の意に依て、法華の信心を釋した故に、器の四失といはれて、前掲の如く四に分つて居られるが、正しく法華の難信を宜べられては、先づ總じて器に就て

器は我等の身心を表す。我等が心は器の如し(意業)、口は器(口業)、耳も器なり(身業)。

と三業に約して、我等が身口意の三業は孰れも器である。然るに此の器に信心の入り難きを述ぶるに當つて、

法華經と申すは、佛の智慧の法水(信心)を、我等が心に入れぬれば、或は打ち返し(意業)。或は耳

に聞かじと左右の手を二つの耳に覆ひ（身業）。或は口に唱へじと吐き出しぬ（口業）。譬へば器を覆するが如し。

こはこれ三業に約して、覆の失に寄せて法華の難信を述べたので、即ち覆せた器に水の容れられぬと同様である。次に

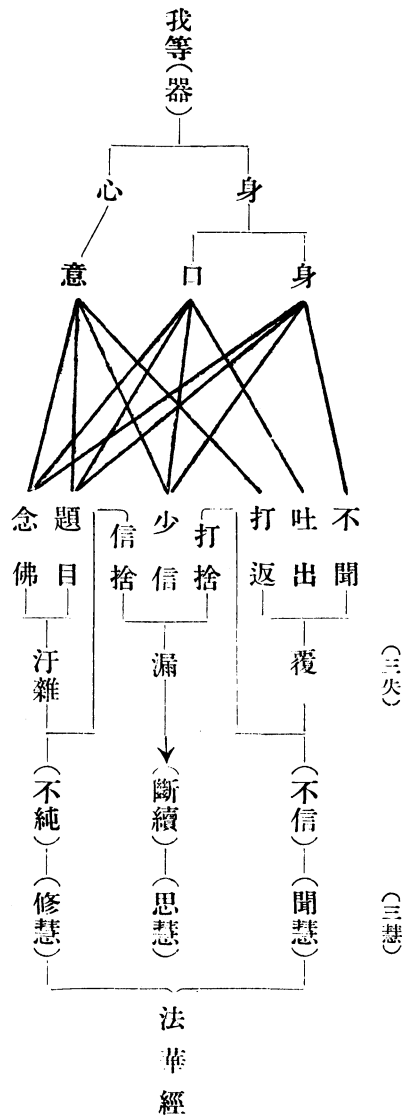
或は少し信する様なれども、又惡縁に値ふて信心うすくなり。或は打ち捨て、或は信する日もあれども、捨つる月もあり。是は水の漏る如し。

とは漏の失に寄せて信心の退轉を述べたもので、恰も漏る器に水を容るゝが如く、何時迄たつても水の溜ることがないと同様で、信心に斷續ある故に容易に信心決定せぬのである。更に

或は法華經を行ずる人の、一口は南無妙法蓮華經。一口は南無阿彌陀佛などと申すは、飯に糞を雜へ、沙石を入れたるが如し。

とは『雜』をいつて汗をいはぬが、これ恐らく妙樂の意に依て『汗雜』に寄せて、信心の不純を述べたものである。己に糞の喩を以て釋した様に、『けがれ』といひ『まじる』といひ、共に純淨ならざる意で、題目と念佛とを混合したのでは、信心が純淨でない故に、何時になつても信心の決定しやう筈はない。

斯の如く大聖人の釋は、初には器の四失を擧げられながらも、後には天台が三慧生ぜすといはれた如く、覆と漏と(汗)難とを次の如く、三業の不信受と、斷續の信心と、難染の修行と三段に就て述べられて居る。即ち今の意を圖表すれば



左の如く、三失は一漏の三方面とも見られる。即ち『惡緣のために打捨て』たるは覆の失に當り、『或は信じ或は捨つる』は難の失に當り、猶豫して信心に斷續あるは信心淺薄なるかためである。

三、三心と三失

右の三失に就て曾て（教報一月號）望月學兄は、法華の三心（所謂渴仰心、質直心、一心）と今の四失との關係を述べて、

覆は不渴仰心。汗は不質直心。雜は不純心。漏は三心の過失に通ずる。義と拜すべきである。『秋元鈔』の四心は要するに、三心の過失を示された教誡である。

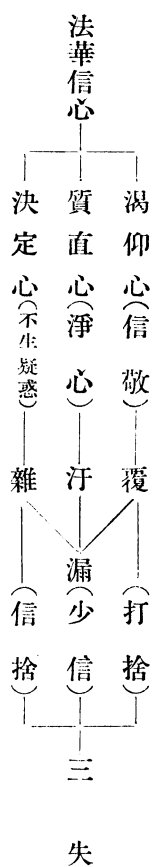
と述べられて居るが、漏が三心に通ずることは今の四失の結文に、
覆、漏、汗、雜の四の失を離れて候、器をば、完器と申してまつたき器也。暫提漏らざれば水失へる事なし。信心のこゝろ全ければ、平等大慧の智水乾く事なし。

といふ文に就て見れば、三失に通ずる意である。併し『秋元鈔』の正しく四失を法譬合して説いた文には、覆、漏、雜丈けで汗の釋は見當らぬ、これは恰も妙樂が四失の中、汗雜を合して一となして、四失は三慧に對して三失とせられた如く、『秋元鈔』の中間釋は正しく三失である、この点は三祖同一徹である。併し乍ら結文の釋や、望月兄の如く四失中覆、汗、雜を所謂法華の三失に合し、或は結文の意に依て漏を三失に通ずとしても、孰れにしても四失は三失となるのである。斯の如く説明上多

少の相違はあつたにしても、畢竟同一結論には落ちつくことにはなるが、覆漏雜を三失とすることは、三祖一徹である。法華の三心とは、これ恐らく淨土觀經の三心に暗示を得て、學兄が自我偈の佛陀の入滅に對する、衆生の切なる情を頌した

咸皆懷戀慕、而生渴仰心、衆生既信伏、
質直意柔軟、一心欲見佛、不自惜身命、

の文に依て法華の信心の内容を三分したもので、『提婆品』の『淨心信敬、不生疑惑』の文も同意である。而して若し最後の一心は『神力品』の結文の『決定無有疑』の文に依れば、又決定心と云つた方が適當であらう。要するに三失は三心に反するもので、



第二の淨心質直心に對すれば汗が適當である。孰れにしても隨義轉用で、要は法華の信心に就て、我等を誡められたに飯するのである。

四、題目と餘行

『秋元鈔』には上述の如く、信心の三失を述べられたが、就中最後の決定心に對する、雜の点にその中心を置かれたのである。これいふ迄もないことで、決定は最後の決定であるからである。即ち雜の大意を述べた後に

法華經の文に『但だ大乘の經典を受持することを樂つて、余經の一偈をも受けず』と説くは是也、と餘經餘行を全部を遮し、更に世間の隨義の解釋に對して

世間の學匠は法華經に餘行を雜へても、苦しからずと思へり。日蓮もさこそは思ひ候へども經文はしからず。譬へば后の大王の種子を妊めるが、又民とごつげば王種と民種と雜りて、天の加護と氏神の守護とに捨てられ、其國破るゝ縁となる。父二人出來れば、王にもあらず、民にもあらず人非人也。法華經の大事と申すは是也。種熟脫の法門法華經の肝心也。

と述べられたことは、『上野殿御返事』に

今末法に入りぬれば、余經も法華經も詮なし、但南無妙法蓮華經なるべし。此南無妙法蓮華經に餘事をまじへば、ゆゑしき僻事なり。嬰兒に乳より外のものをやしなふべき歟。良藥に又藥を加へぬ

事なし。(二七一七)

といへる文に對照して、今の雜の失を知るべきである。即ち雜は決定心に反するからである。故に妙法五字に約して法華の下種を判じて

三世十方の佛は必ず、妙法蓮華經の五字を種として佛に成り給へり。南無阿彌陀佛は佛種にはあらず。眞言の五戒等も種あらず、能々此事を習ひ給ふべし、是は雜なり。

と雜の意を決し、最後『信心のこゝろ全ければ、平等大慧の智水乾くことなし』と、妙法の下種は謗法の四失即ち三失を離ることに依て成熟し、終に佛果を決定すべきことを述べられたのである。

若しそれ法華の三心を御遺文中に求むれば、『妙一尼御前御返事』(一九四八)に『妻のおとこをおしむが如く、親の子を捨てざるが如く』とは渴仰心。『法華經釋迦多寶等を信じて南無妙法蓮華經と唱ふる』とは質直心、『不受餘經一偈の經文を、少しも捨つることなき』とは決定心を釋されたのである。若しこれを信の淺深に就て、見るならば、信受。深信。決定信の三信と見るべく、更にこれを又信行の上から見ると、信受は信前行後であり、信は信行俱時であり、決定信は行前信後といふべきである。即ち信の三失に對して、今の三信を以て信の三徳と稱すべきである。

附、謀叛の二十六人

一、大石山(小)丸は誤

尙ほ『筒御器鈔』に於て注意すべきは、我國謀叛の二十六人の中第二人に就てゐる。即ち

日本國に代始まりてより、已に謀叛の者二十六人。第一は大山の王子、第二は大石の山丸乃至第二十五人は頼朝、第二十六人は義時也。(一九三二)

といひ。『新池殿御返事』には

我朝人王九十一代の間に、謀叛の人々は二十六人也。所謂大山の王子、大石の小丸乃至將門、純友、惡左府等也、(二八四八)

といへるを見るに、前者には『大石の山丸』といひ、後者には『大山の小丸』といふ。右に就て『啓蒙』師は

大石山丸が事は日本紀等にも無之、本據知れざれば、山丸小丸の是非を糺すに及ばず。(二九五—三五四九)

といつて本據不明として居るが、若し『聖典大辞林』(六二二)は、山と小と誤讀され易き、『法門可申鈔』の御眞蹟を出し。『類纂本』は『源平盛衰記』等に準じて『新池殿御返事』の如く『大石小丸』として居る。

然るに右に就ては昨年の春、大阪の岡嶋伊八氏より、大石の山丸は、文石あやしの小丸の誤で、右は『日本書紀』並に『國史略』共に雄略帝十三年の條に依て明瞭となつたが、『日本書紀』十四三二の文に依れば

雄略天皇十三年、秋八月播磨國御井隈人、文石小磨有レ力強レ心肆レ行暴虐。路中抄劫、不便レ通行。又斷レ商客レ船舫、悉以奪取、兼違レ國法、不レ輸レ租賦。於是天皇遣レ春日小野臣大樹領レ敢死士一百、並持レ火炬圍宅而燒。時自レ火炎中、自狗暴出逐レ大樹臣、其大如馬。大樹臣神色不レ變、拔刀斬之、即化爲レ文石小磨。

とあり、『國史略』一二九『文石小丸』に作り。『扶桑略記』は『大石少磨』に作り。『平家物語』五『朝敵ぞろへの事』の下又『大石の山丸』に作り。『源平盛衰記』十七の『謀叛不レ逐素懷事』の下亦『大石山丸』に作る。これ古來轉寫の誤で、文と大と誤り、小と山と誤りて、遂に文石の小丸(磨)を、大石山丸と書するに至つたものである。

二、三書の列名

若し謀叛の二十六人に就ては、大聖人果して何に依られたか不明であるが、『和語式』三には『平家物語』を引き。『啓蒙』二九五〇には『平家物語』『源平盛衰記』『太平記』の三書を引用して居るが、右三書の記事は孰れか本になつたので、粗ぼ同一の形式で記されて居る。芳賀博士の如きは『平家物語』に就て『書中の史實より推して、此物語が今日の形を取るに至りしは、略御深草天皇の建長十二年の頃なり』といひ。『盛衰記』に就ては『平家物語と前後は明かならず』(國文學歴代選備考)といふが、今『平家物語』五の『朝敵ぞろへの事』の下、『盛衰記』十七の『謀叛不逐素懷事』の下並に『太平記』十六『日本朝敵事』の下に列擧する人名を見るに、

(太平記)

- (一) 土蜘蛛。
- (二) 藤原千方。
- (三) 平將門。
- (四) 大石山丸。

(源平盛衰記)

- (一)
- (六)

(平家物語)

- (一)
- (二)

- (五) 大山王子。(大山守皇子
應神帝第二子)
- (六) 大友^{オホトモ}眞鳥^{マニトリ}。(大友皇子
弘文天皇)
- (七) 守屋大臣(物部弓削守屋)
- (八) 蘇我入鹿
- (九) 豐浦大臣(蘇我蝦夷)
- (一〇) 山田石川。(蘇我倉山田
石川麻呂)
- (一一) 長屋右大臣。(長屋王
天武帝孫)
- (一二) 豐成右大臣(藤原豐成)
- (一三) 伊豫親王(桓武帝皇子)
- (一四) 氷上川繼^{ヒノヘ}。(天武帝四代孫)
- (一五) 橘純友? (逸勢の誤?)
- (一六) 文屋宮田(藤原田磨)
- (一七) 惠美押勝(藤原仲麿)
- (一八) 井上皇后。(聖武帝女
光仁帝后)

筒御器鈔の法門

- (二) (七) (六) (五)
- (三) (四) (七) (三) (二) (六) (五) (三)

(元) 橘^{はやなり}逸勢^{はやなり}
廣嗣弟なり、啓蒙に兄といふは誤なり。

- (三) (二) (八) (九) (三) (四)
- (四) (六) (五) (七) (三)

○(元) 早良^{さばら}太子(光仁皇子
崇明天皇)

△(三) 大友皇子(第六重複)

(三) 藤原仲成

△(三) 相馬將門(第三重複)

(三) 天慶純友(藤原)

(四) 康和義親(源)

(五) 宇治惡左府(藤原賴長)

(六) 六條判官爲義(源)

(七) 惡左衛門督信賴(藤原)

(八) 安倍貞任

(九) 全 宗任

(一〇) 清原武衡

(一一) 全 家衡

(一二) 平相國清盛

(三)

(三)(九)(四)(二)(六)

(七)(二)(三)(三)

(三)

(六)(七)(八)(三)(三)

(三)(九)(一〇)

全一三

全一五

全一六

全一七

全二〇

全二一

全二二

全二八

全一九

(三) 木曾冠者義仲

(四) 河佐原八郎爲頼

(五) 北條高時

(六) 足利尊氏

(八) 眞如親王 （平城帝第二子）
高丘親王

(九) 太宰少貳藤原廣嗣

(一五)

全八

(一八) 源頼朝？

(二四)

”

○ 皇 族、 △ 重 複 () 太平記不載、

今三書の列名に就て見るに、『平家』『盛衰記』は土蜘蛛より惡左衛門督に至るまで、前者は二十三人、後者は三十七人である。然るに『平家』には頼朝に就て、

然るに其恩を忘れて、當家に向ひて弓をひき、矢を放つにてぞあんなれ。其儀爲らば神明も三寶も、いかでか赦し給ふべき。唯今天の譴蒙らんずる頼朝かな……………（盛衰記同一記事）

とあるに依て、且らく頼朝を二書の列名に加へれば、二十四人、二十八人となるのである。而して二書の相違は『盛衰記』が、（五）の長屋王、（六）の豐成と、（八）の直如親王、（三）の清原武衡との四人を加へたからである。

若し『太平記』と『盛衰記』との相違は、『太平記』の列名三十五人と、當の朝敵たる足利尊氏を加へて三十六人とするが此の中には（三）の平將門と（三〇）の大友皇子とは、重複する故に之を除いて、

計三十四人である。而して『盛衰記』と數に依ては六人の相違であるが、人には十二人の相違があるのである。即ち『盛衰記』には『太平記』に挙げぬ、(八)の直如親王、(二九)の藤原廣嗣、(三八)の源賴朝の三名を舉げて居るし。又『太平記』には『盛衰記』に見えない。(二)の藤原千方 (九)の豊浦大臣、(二六)の源爲義 (三)の清原家衡、(三三)平清盛、(三三)の木曾義仲、(三四)の源爲賴、(三五)の北條高時 (三六)の足利尊氏の九人を出して居るからである。故に三書通じて謀叛人として、都合三十九人となるのである。

三、二十六人に就て

然るに大聖人は『簡御器鈔』には、「日本國に代始まりてより、己に謀叛の者二十六人」一九三二と遊ばさるゝ故に、三書の人數に比して十三人の相違がある。併し『神國王書』に依れば

神と申すは又國國の國主等の崩去し給へるを、生身のごとくあがめ給ふ。此小國王國人のための父母也。主君也。師匠也。片時もそむかば國安穩なるべからず。此を崇むれば國は三災を消し、七難を拂ひ、人は病なく長壽を持ち。後生には人天と三乗と佛となり給ふべし。……王威を用ひて民をせめば、鷹の雉をとり、猫のねづみを食ひ、蛇のかへるをのみ、獅子王の兔を殺すにてこそある

べけれ。……王法の力に大法を行ひ合せて、賴朝と義時との本命と元神とをば、梵王と帝釋等に抜き取らせ給ふ。二三五—五六

と宣ふを始めとして、承久の亂等に對する大聖人の尊王論よりして、所謂『謀叛の二十六人』の中へは、恐らく皇族關係の方々を加へられなかつたのではなからうか。然るに『筒御器鈔』の先の連文には謀叛の者二十六人、第一は大山の王子。第二は大石の山丸、乃至第二十五人は賴朝、第二十六人は義時也。二十四人は奉被責朝、獄門に被懸首山野に曝骸。二人は奉傾王位國中を拳手、王法既に盡きぬ。一九三二

と記された点からすれば、三書に見ゆる(一)の土蜘蛛は除かれたが、第一を大山の王子として、應神帝の第二皇子を出された点から見れば、必ずしも皇族關係を除かれたのでもない様である。

されば『啓蒙』二九には上掲の三書と大聖人の二十六人とを會して『平家』の二十四人の中賴朝を除き、事件の内容からして、(八)の文屋宮田と(二五)の藤原廣嗣(即ち宮田麿は廣嗣の第三弟である)とを合して一となし

已上廿二人也。太平記には豊浦大臣と、左大臣長屋王と、右大臣豊成とを加へ。更に爲義清盛義仲をも列ねたれば、其内にて何れにても誅罰に値へる二人を加へて廿四人とし。更に賴朝義時を添

へて廿六人とし玉へるなるべし。(二九 四五左)

と述べ、次で『和語式』三四七を誇して

語式平家の誤をたゞす、少貳と廣嗣とを分て二人として廿三人とし。更に宗盛を加へて廿六人とせる事、一笑を發するに足れり

といふが、勿論太宰少貳藤原廣嗣を、官名と人名とを分つて二人とすることは誤であるが、『啓蒙』が宮田麿と廣嗣とを分けなかつたのは。似て非なる誤である。

四、誠意奈何

要するに大聖人の所謂謀叛の二十六人とは、既に第一に大山の王子を數へて居る点からして、別して皇族に關係ある方々を除いたでないことは、前述の如く明であるが、又三書の最初に數へた土蜘蛛を除いたことも明である。且つ最後に賴朝、義時を列ねた点から見れば、三書孰れに依つたともいはれぬが、大体『平家』『盛衰記』等を資料として、蘇我物部の爭、宮田麿廣嗣の事件、安倍の兄弟、清原の兄弟等の變を事件中心にして、賴朝義時等を加へられて廿六人としたものが、或は『平家』等を資料として、其の内容の聖意に依て取捨せられて、賴朝義時等を加へて、二十六人とせられたもの

であらう。恐らく後の意に近からうと思はれる。

若しそれ大石の山丸（小丸）とせる点に就ては、『平家』『盛衰記』『太平記』等の専門史傳が孰れも誤まつて居る故に、恐らく同一資料に依られた、大聖人の誤は當然のことである。

—「四、一〇、一一」—